

## 回顧的方法論としてのアンリ・ルフェーヴルのマルクス読解

フランスの社会学者・哲学者であるアンリ・ルフェーヴル (1901-1991) は、1948年の著書『マルクス主義』(クセジュ文庫)の註においてマルクスをひとつの方法論の創始者、換言すれば「科学」の創始者として位置づけ、マルクス主義が「学」として打ち立てられる必要性に言及していた。すなわち、マルクスと同じく19世紀を生きたルイ・パスツールが切り開いた「細菌学」を「パスツール主義」とは言わないように、「マルクス主義」という名称がいつかは使われなくなるだろうという見通しを表明していた。

本報告の目的は、ルフェーヴルの都市空間論や日常生活批判といった主要な著作に共通する思考法がルフェーヴルの方法論としてのマルクス読解といかなる連関にあるのかを明らかにすることである。ルフェーヴルの諸著作においてははっきりとマルクスの方法論について言及する箇所は数少ないが、「過去」の位置づけに着目するとマルクスを下敷きにしたひとつの方法論を見出すことができるという仮説を検証の出発点とする。

端的には1972年の著書『マルクス主義の思考と都市』のなかに、「マルクスは過去(出来事や文書)を生き返らせ、未来に役立てることとして自分の方法論を示したのである」という指摘を見出すことができる。こうした現在からいちど過去に戻り、未来を構想するという方法は「回顧的〔retrospectif〕」、「社会の生成」というふたつの語に関連づけられて、ルフェーヴルの複数著作で言及されている。

その代表的な記述のひとつが『日常生活批判Ⅱ』(1961)における「イマージュ」の働きに関する説明のなかで指摘される回顧的な方法である。また、しばしばルフェーヴルの主著される『空間の生産』の「第3版への序文」(1984)においても、同書におけるルフェーヴルの方法論は「社会空間を歴史と生成において『回顧的に』研究する方法であり、現在から出発してその生成へとさかのぼり、ついで現実的なものへと立戻する方法である。この方法によって、可能性と将来性を予見し得ないまでも垣間見ることはできる」とされている。

以上から、すくなくとも1960年代から1980年代にかけてのルフェーヴルの日常性の議論と都市空間論はどちらも「マルクスの回顧的方法」に貫かれているという読解が可能である。本報告ではこの点について、『空間の生産』の「第3版への序文」において言及される、社会的に生産されたものを準拠にしてその社会の「生成」へと立ち戻って考察するという「社会の生成」の議論などルフェーヴルの社会理論の諸側面との連関のなかで詳細に検討をおこなう。現在の社会を出発点として、そこから遡るように過去へと参照点をもとめつつ、いまは不可能に見えるがいつか可能となりうるもの未来としての「ユートピア」を提示するルフェーヴルの社会理論が、「回顧的方法としてマルクス」の継承であるという考察は「マルクス読み」としてのルフェーヴルに新たな視角をもたらすことができるだろう。